

埼玉県 アートスタイル

SAITAMA
STYLE

art center syu 2019 report

SAITAMA
STYLE

みん
なで
つ
く
る

Saitama-style



2019
2020

埼玉県障害者芸術文化活動
支援センター

アートセンター集

art center syu
2019 report

社会福祉法人
みぬま福祉会
Minuma Hukushikai



もくじ

- P

3

はじめに
- P

4

埼玉方式 I 見学会
日々の表現と向き合う
- P

8

埼玉方式 II 研修会
支援のまなざしを育む
- P

10

埼玉方式 III 選考会
多様な視点で語り合う
- P

12

埼玉方式 IV 展覧会
アートのチカラで未来を創る
- P

18

埼玉方式 V ダンス
新たな可能性を探求する
- P

20

アートセンター集のご案内

はじめに

障害のある
人たちの
“表現”を社会に
広げるために —

埼玉県障害者アートネットワークTAMAP士〇(通称タマップ)では、様々な人たちがつながり活動しています。

福祉施設の職員たちが学びながら企画・運営する「埼玉県障害者アート企画展」や、美術の専門家と福祉施設の職員などが多様な視点を交えて選ぶ「作品選考会」、日常の行為から生まれた表現も広く発掘する、県の「表現活動状況調査」など独自の支援活動を通して、障害のある人も支える人も、専門家も行政も、ともに多様な表現の魅力を享受しながらアートの可能性を探求しています。

この10年をかけて県内で取り組んできた障害者芸術文化活動は、全国でも先進的な取り組み「埼玉方式」として注目を集めています。2016年には長年、表現活動を続けてきたみぬま福祉会・工房集(川口市)に、埼玉県障害者芸術文化活動支援センター「アートセンター集」を開きました。

本書では、2019年度の活動報告とともに、私たちが大切にしていることをご紹介します。



埼玉方式 I 見学会

atelier tour
2019/9/30, 10/31, 11/11

🌸 日々の表現と向き合う

表現することは生きることそのもの。
その支援は福祉の延長にあり、その人らしく生きる日々の中で
周囲の理解と関わりにより育まれています。

atelier tour

表現を仕事に

みぬま福祉会では、表現活動も仕事として捉えています。どんな障害も受け入れることを基本理念とし、表現活動は1994年頃、どの作業にも合わなかった重い障害のある仲間と向き合い、その仕事を模索する中から始まりました。当初は少人数の活動でしたが、共感してくれるアーティストなどの協力もあり、2002年にアトリエ、ギャラリー、カフェ、ショップを備えた工房集を開設。展覧会を開き、表現がアートとして評価される経験を重ねることで、周囲の理解も得られ、活動が浸透していきました。現在では11のアトリエを中心に、約150人の仲間がそれぞれの表現活動を日々、仕事として取り組んでいます。

※ みぬま福祉会では施設利用者を「ともに働き・暮らし・地域をつくる仲間たち」という思いをこめて「仲間」と呼んでいます。



“想いに寄り添う”



障害のある人の表現は、決して特別なものではありません。誰もが持つ表現の源泉から生き生きと現れる個性が、多くの人の心を揺さぶりアートとして評価されています。その表現は、一人ひとりの日常から生み出されています。

みぬま福祉会では、美術が得意な人や優れた作品を集めるのではなく、日々、一人ひとりの気持ちを大切に表現と向き合い、そこから生まれた作品を社会に発信しています。



関わりながら待つ

<http://kobo-syu.com/>



何のために誰のために

アートセンター集では、その表現活動の現場(5つのアトリエ)を巡り、表現活動には何が大切か、ともに支援の在り方を考える「アトリエ見学ツアー」を行っています。絵画や織物などの制作ができない仲間も「これしかできない」ということから作品を生み出している、多彩な表現が共存する創作の場を見てもらい、担当スタッフが仲間の成長や、スタッフや仲間同士の関わりなどについて話をします。また、仲間たちも自ら作品づくりへの想いを語り、カフェの運営に携わる家族にもカフェの役割や想いを語ってもらっています。2019年度は3回実施。48名が参加しました。





定例会の様子



グッズ研修の様子

月1回のTAMAP士〇定例会では
福祉施設職員たちが展覧会に向けて
学びながら話し合いを重ねています。

http://artcenter-syu.co.jp

Saitama-style

埼玉方式 II 研修会

支援のまなざしを育む

表現と向き合うことは、支援のまなざしを育むこと。
その魅力を探り語り合うことで、作者や表現に向けるまなざしが
大きく変わります。

workshop
2019/4-2020/1



展覧会の実践

「埼玉県障害者アート企画展」では、長年、障害のある人の表現活動に携わっているアートディレクター中津川浩章さんのファシリテーションのもとで、福祉施設の職員たちが学びながら企画・運営を行っています。この研修では、単に展示手法を学ぶだけでなく、それぞれが支援のまなざしを育むことを大切にしています。その展覧会の実践で様々な表現や対話から得た気づきを、日々の支援につなげています。



グッズ研修 2019/6-2020/1

表現や作者と社会や人をつなぐ商品化の中間支援をしているcon*tioの杉千種さんと山口里佳さんが、主に福祉施設職員向けに毎年、行っています。2019年度は、参加施設の商品の新作・改良だけでなく、蓮田はすの実作業所の事例を元にブランディングしていく過程に参加しながら学ぶ研修を行いました。



著作権研修 2020/1/23

弁護士の岩本憲武さん(モッキンバード法律事務所)が「権利保護に関するセミナー」で、作品や商品を守るために必要な権利や契約などについてわかりやすく解説。「こんな作品ってあり？」など現場に即した疑問にも答えています。2019年度は46名が参加しました。



展示レクチャー 2019/11/21

毎年、企画展でキュレーションを担当している美術家中津川浩章さんが展示作業の心得や基本についてレクチャーを行いました。



art center syu 2019 report

Saitama-style



表現活動状況調査の回答数は5年前に比べ約2倍に増え、2018年度は埼玉県社会福祉事業団あげお（上尾市）の広い部屋を借りて選考を行いました。

埼玉方式 III 選考会

多様な視点で語り合う

日常の表現の中にアートの原石が隠れています。多様な視点を交えて新たな表現を発掘することで、アートの可能性が広がっています。

「Untitled」
野本竜士



selection meeting
2019/8/8

アートと福祉の視点が交錯

選考会ではまず、各自持ち票分の付箋を気に入った作品（調査票）に貼り、得票順に出展作家をある程度絞った時点で意見を交わし、残りの出展作家を選んでいきます。それぞれ気になる作品について、どこが好きか、何が気になるのかを自由に語ります。その発言から作品の魅力が見えてきたり、議論が深まったり……。作者を知る施設職員が、作品ができた様子や背景、作者のこだわりや障害特性などを語ることも多く、それが日頃、作品だけを見て評価している美術の専門家には、自身の判断や固定観念を揺るがす刺激に。また、施設職員にとっては、専門家の評価から、作品を読み取る視点や感性を学び、自身の視点や感じたことを言葉にする機会になっています。そのアートと福祉の視点の交錯によって毎年、新たな発見や気づきが生まれ、またそこから「人間にとって表現とは何か」「何がアートなのか」を考える豊かな時間が生まれています。

selection meeting

「これってアート？」も発掘

埼玉では、2009年から県主導で毎年、障害のある人（福祉施設や事業所、支援学校、個人など）の芸術・文化活動の実態を把握する「表現活動状況調査」を実施しています。絵画や造形、ダンス、詩などのほか、作品かどうかかわからない表現も含め、広く埼玉に眠るアートの原石を発掘している点が特徴です。「埼玉県障害者アート企画展」では、調査票（作品画像）をもとに作品選考を行っており、毎年、他に類を見ない多彩でユニークな出展作品がそろいます。また、その選考には、美術の専門家だけでなく福祉施設の職員をはじめ弁護士、行政職員なども参加して、様々な視点を交えてディスカッションしている点も大きな特徴です。2019年度は、総勢84名で約600の調査票から135名の出展作家を選出しました。



【2019年度 選考委員】 中津川浩章（美術家、アートディレクター）、小澤基弘（埼玉大学教育学部教授／絵画及び美術教育、画家）、酒井道久（彫刻家、埼玉県立大学名誉教授）、前山裕司（新潟市美術館館長）、岩本憲武（弁護士／モッキンバード法律事務所）、山口里佳（コーディネーター／con*tio）、杉千種（同左）、武居 智子（ライター）、水川 史生（デザイナー）、埼玉県福祉部障害者福祉推進課4名、福祉施設職員71名



第10回埼玉県障害者アート企画展
「Knock art 10 - 芸術は無差別級 -」
@埼玉県立近代美術館

埼玉方式Ⅳ 展覧会

✿ **アートの子カラで未来を創る**

人間にとってアートとは、表現とは、障害とは。
多様な表現で本質を問いながら社会に新たな価値を創造しています。



「食す」小林一緒

exhibition
2019/12/4-8

言葉でのコミュニケーションが難しい重い障害のある人の作品も多く、なぐり書きのような線描画や紙に穴が開くほど色を塗り重ねられた絵画、得体の知れない集積物などから、その表現の痕跡を辿り、作者にとっての表現の意味を探ることが、「表現とは何か」という本質を問うことにつながっています。選考会でも、表現を糸口に対話を深め、毎年、既存の美術の枠におさまらない、心動かされる新たな作品を発掘し、来館者とともに「障害のある人の表現の魅力とは何か」「その社会的価値や意義は何か」を考え、アートの可能性を社会に問う、埼玉独自の展覧会が生まれています。

exhibition

問い続ける埼玉県障害者アート企画展

埼玉県では、障害者の自立や社会参加の促進、多様性を認め合う社会の実現などを図る手段として、2009年から県や県内の福祉、美術、教育等の関係者・機関が連携して障害者アートの普及を推進しています。「埼玉県障害者アート企画展」は県主催で始まり、2016年から官民が一体となって継続しています。

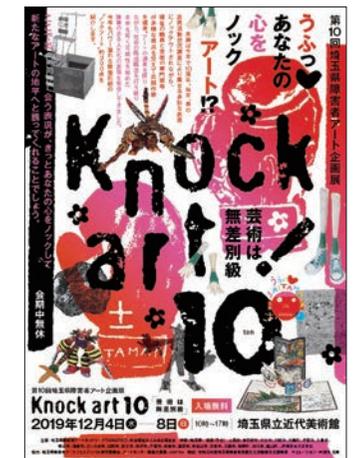
毎年、多様な視点を交えて選考される出展作品には、緻密な描写の絵画、独創的なフィギュアなど、既に国内外で高く評価され個展が開かれている作家の作品から、それまで作品として発表されることのなかった日々の行為から生まれた造形や書きためられた言葉の蓄積まで、実に幅広い表現がそろう。



「飛び込みプール」片波見知代



「舞妓さん」武石トシ子





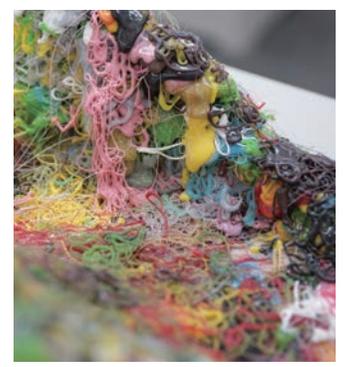
exhibition

第10回埼玉県障害者アート企画展

Knock art 10 「芸術は無差別級」

ここで出会う表現が、きっとあなたの心をノックして新たなアートの地平へと誘ってくれることでしょう。

本展では毎年、県の表現活動状況調査により集まる多彩な表現にノックアウトされながら、出展作家を選考。アートの源泉を探りながら、社会の既成概念を打ち破り未来を拓く可能性を秘めた表現を発信してきました。10周年を迎えた今年度は埼玉県立近代美術館を会場にパワー溢れる500点を超える“無差別級のノックアート”を紹介。5日間で延べ1,701人が来場しました。



福祉とアートは一見すると水と油です。アートは才能やクオリティ、希少性に意味と価値を見出していく部分があり、一方福祉は公平性や平等性そして日々の暮らしや想いに価値を置いている。しかし福祉とアートには、そうした水と油のような価値観ではなく、もう一步内側の、深い場所での出会いがあります。

ご覧いただく135名の作家による作品は30団体の福祉施設のスタッフとアート・教育・デザイン・法律等の各専門家が対話を重ねセレクトしました。

さまざまなことが不自由な生きづらい人にとって、表現することは生きることそのもの。コミュニケーションと芸術の間を横断しながら、それぞれの切実な必然性から生まれてくる作品の数々は、生きるエネルギーに満ち、見る者を強く揺さぶります。

さらに何かを説明するためにではなく、線を描くという行為それ自体にどういう意味があるのか。外側の規範によらず、感じたままの形を描き色彩を描くということの意味は？人間が表現するということは根源的にどのようなことなのか……作品からの問いかけは、1万5千年前のラスコーの洞窟壁画が投げかける問いと重なります。

福祉とアート等それぞれからの視線が交錯し、越境することで浮かび上がる新しい視野の広がり。人間が表現することの原点が、ここにあります。

「knock art 10 “芸術は無差別級”によせて」より

アートディレクター 中津川 浩章



「織り&グッズ店(展)
ツグズムズ12」
@工房集

exhibition

exhibition
2019/11/1-10

アーティストトーク

この埼玉県障害者アート企画展では、毎回、出展作家が作品について語る「アーティストトーク」を行っています。作者本人をはじめ施設の担当者や家族が作品の生まれた背景やエピソード、創作への想いを話すことで、来場者がより深く、作者や表現を知る機会になっており、また、その交流が、作者と表現をさらに豊かに育み、周囲の意識にも変化をもたらしています。今年度はキュレーターの中津川浩章さんと新潟市美術館の前山裕司館長が、全作品の魅力を活かした「ギャラリートーク」も行いました。また、関連企画として中津川さんによる10周年特別講演「障害者アートの魅力と可能性」も行われました。

グッズ展とライブパフォーマンス&ワークショップ

埼玉では、この企画展のほか、連動する展覧会も開催しています。毎年、グッズ研修の一環として開催している「グッズ展」では、福祉施設などで日々、創作に励んでいる作家が来場者との対話から絵や書や詩を創作する「ライブパフォーマンス」や、スタンドグラスなどの作家が講師を務める「ワークショップ」も行っています。これらの多様な表現との出会いを育む展覧会を様々な人たちと共有することで、作者の自信や意欲はもとより施設の職員や仲間、家族など周囲の人たちも表現や作者に対する意識にも大きな変化がもたらされ、表現や支援の活動の輪が広がっています。



オープニングセレモニー



10周年特別講演



アーティストトーク



ワークショップ



ライブパフォーマンス



埼玉方式 V ダンス

Let's dance
2019/7-2020/1

✿ 新たな可能性を探求する

だれもが輝きを秘めている。
それが表現となり人の心を動かし、生きる力になっています。



©埼玉県障害者交流センター

Let's dance

それぞれの動き

美術以外の表現の発掘として、2019年度は、ダンスワークショップを4回開催しました。障害や年齢を超えて活動するダンスグループ・ベストプレイスの主宰、竹中幸子さんを講師に招き、延べ114人が参加。音楽に合わせて様々な動きをする中で、一人ひとりの動きを引き出していきました。初めて会う参加者同士が、一緒に動きを楽しみ、最初は緊張気味だった参加者の表情も自然にほぐれていきました。日常が少し変化した参加者もあり、「楽しかった」「もっと踊りたい」という感想が多く聞かれました。



困難や例外的な状況にある人を切り捨てない。

つないだ手を離さない姿勢は、人間の「よりよく生きたい」という当たり前の願いと共通して
個や集団を発達させる力になります。

他者の痛みに共感し、怒りや不安、危機感を同じように感じる事が、できるかどうか。

仲間も家族も職員も一人ではありません。

多くの人と手をつなぎ、たくさんの力が合わさって、きっと社会を変えていく力になるのです。

————— みぬま福祉会リーフレットより



埼玉県障害者芸術文化活動支援センター

✿アートセンター集のご案内

障害のある人やその支援者の課題の解決や情報交換、ネットワークづくりなどの場として2016年、厚生労働省「障害者の芸術活動支援モデル事業」の助成を得てオープンしました。2017年からは、同省「障害者芸術文化活動普及支援事業」の助成を受けて事業を行っています。

その根底にあるのは、一人ひとりが主体的に生きていること。豊かに生きていること。

楽しく暮らしていること。人間らしく、生き生きしていること。そのことを大切にしていること。

工房集は、そこを利用する仲間だけの施設としてではなく、新しい社会・歴史的価値観を創るためにいろんな人が集まっていこう、そんな外に開かれた場所にしていこうという想いを込めて「集(しゅう)」と名付けました。

障害の重い人の表現の可能性を模索し続け、その中から生まれた作品を通じて、多くの人とつながり、関わり、

新たな可能性が生まれてきています。

表現することは、人間が生きていることそのもの。

表現活動を通じて、障害の有無に関係なく、人と人とを豊かにつないでいきます。

ひろげるPlan 事業計画

「埼玉県障害者アート企画展」の開催を中心に、毎年連動する展覧会や研修等の支援事業を計画しています。



ささえるSupport 相談窓口

障害のある人やその家族、支援者の「創る」「深める」「広げる」「守る」をサポートしています。

例えば

- 作品を発表したい
 - アート活動をはじめたい
 - 支援の仕方がわからない
 - 商品にしたいが著作権が心配
- など

福祉、アート、教育、行政、司法などの専門家や専門機関と連携して対応しています。また企業等からの障害者アートの活用等の相談も受け付けています。どうぞお気軽にご相談ください。

電話：048-290-7355 (平日10:00-17:00)

メールアドレス：kobo-syu@marble.ocn.ne.jp

※個人情報の保護を厳守し流用はいたしません。ご相談に応じるために関係者・機関と情報を共有する場合があります。ご了承の上、ご心配な点は遠慮なくお申し付けください。



埼玉県障害者アートネットワークTAMAP士〇

つなげるNetwork TAMAP±〇

- 様々な境界を超えみんなで学び合うフラットな関係をつくる
 - 表現する人、支える人、周りの人、みんなが主体の意識をもつ
 - 表現の魅力や可能性、新たな価値をみんなで探求する
 - 連携力を活かしそれぞれの強みを発揮する
 - 活動や情報を共有する場をつくり助け合う
 - それぞれの事情に合わせ活動できるゆるやかさをもつ
- ……などを大切に、みんなでつくるネットワークです。

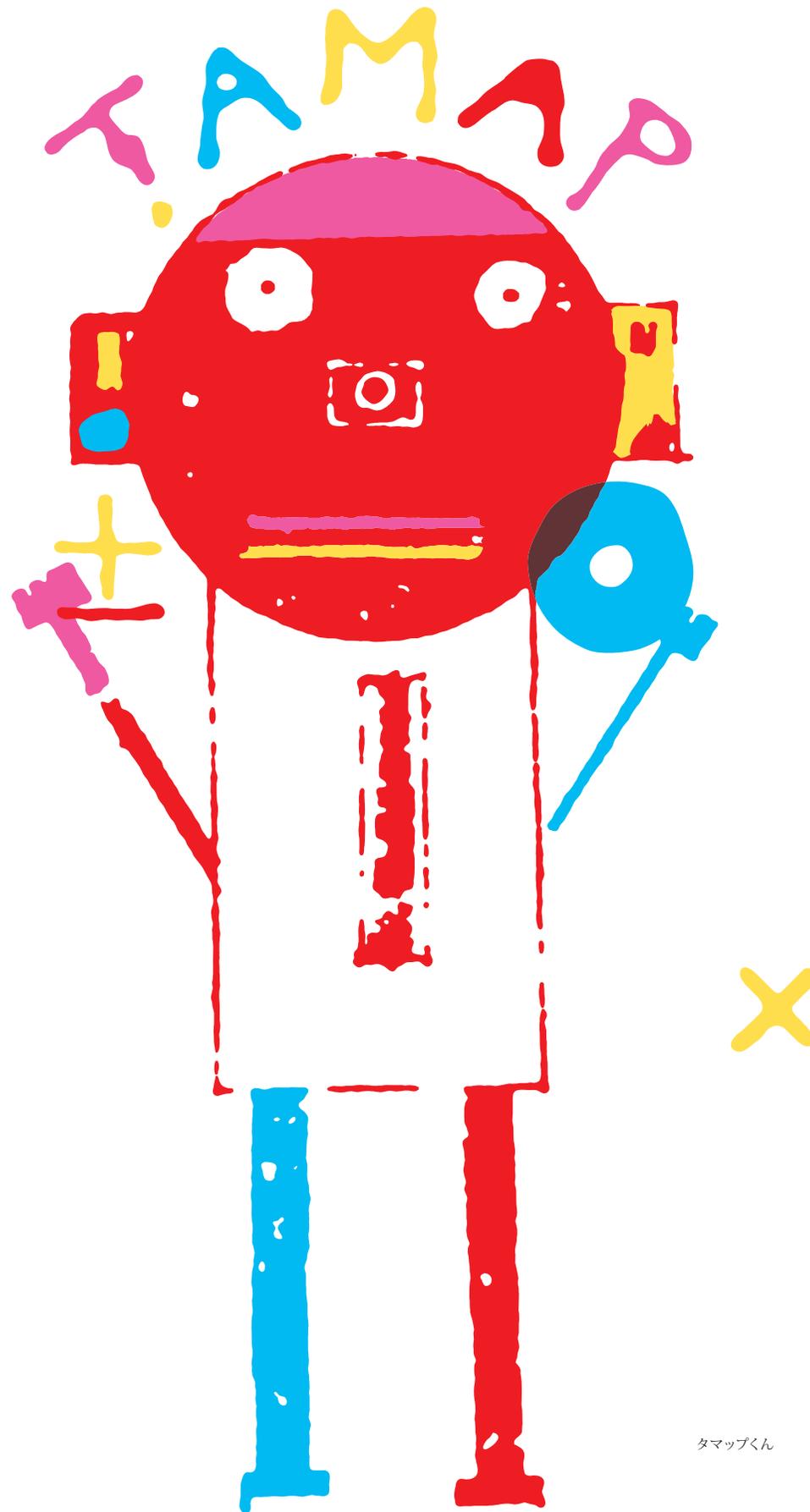
県内の福祉施設や事業所のメンバーが中心となり、様々な人たちとともに支援の輪を広げています。

「埼玉県は特にこれといって特色がないんです」と言ってしまうほど謙虚で控えめで県内の自慢が下手な県。でも良いところはたくさんある。そういったイメージを一言であらわすと…±〇。

埼玉県は「ブラマイゼロだ」という障害のあるメンバーの意見に「埼玉をもっとアップ(向上)させたい」「県内のつながりをマッピングしよう」という想いをあわせて、埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±〇(タマップ)と命名しました。謙虚で控え目な中に様々なものを良しとする懐の深さ(ごちゃまぜ上等!)を持ち合わせている。「そんな埼玉を盛り上げて行こう!」という想いを込めています。

月1回の定例会では、企画展などに向けた活動をしながら、支援の悩みを語り合ったり表現活動の情報交換をしたりしています。11団体から始まり2020年3月現在、30団体余りが参加。それぞれが地域などでも展覧会やイベントを開き、障害のある人の表現の普及に取り組んでいます。

みなさまのご参加をお待ちしています!



タマップくん

これまでの活動報告やシンポジウムなどの記録、出展作品や今後の展覧会・研修会などの情報は、随時ホームページにアップしています。ぜひ、ご覧ください。

ホームページ

- アートセンター集

<http://artcenter-syu.com/>



- 工房集 <http://kobo-syu.com/>
- みぬま福祉会 <http://minuma-hukushi.com/>

厚生労働省「令和元年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業」報告書

art center syu 2019 report

みんなでつくる ^{スタイル} 埼玉方式

2020年3月1日発行

企画・編集・発行：社会福祉法人みぬま福祉会

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター
アートセンター集

〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂1445(工房集内)
TEL 048-290-7355

アートディレクション：水川 史生(en design studio)

写真撮影：武藤 奈緒美、水川 史生、今井 紀彰、
鈴木 広一郎、工房集

題字・キャラクター(タマップくん)図案：尾崎 翔悟(工房集)

構成編集：武居 智子、con*tio、工房集

事業にご協力くださいました皆様、誠にありがとうございました。

© 社会福祉法人みぬま福祉会・埼玉県 ※無断転載厳禁

art center syu*
SAITAMA*
STYLE*